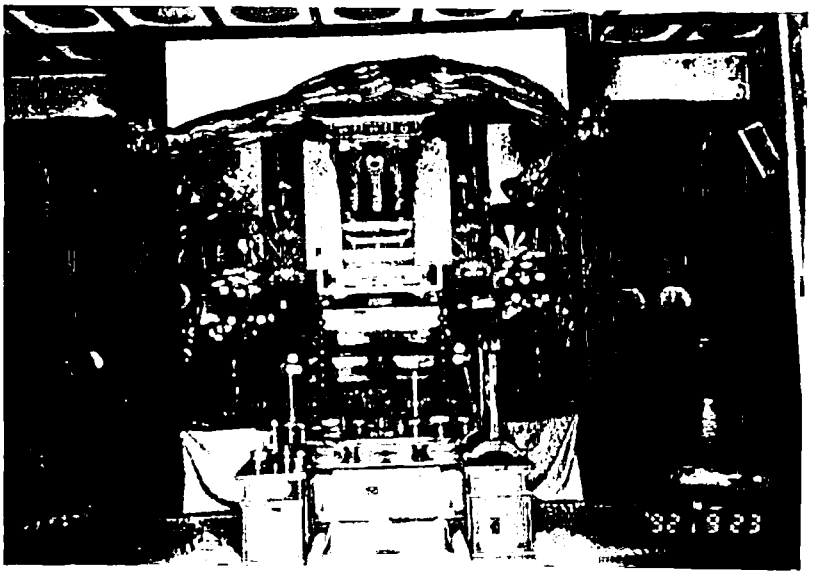
特攻会報
平成5年3月
第16号

〒105 東京都港区虎ノ門
3—6—8　第6森ビル
特攻隊慰霊顕彰会
特攻平和観音奉賛会
電話　03(3432)1090

編集人　田中賢一
発行人　最上貞雄

第41回特攻平和観音年次法要

平成4年9月23日　世田谷観音寺



本年の年次法要は例年通り秋の彼岸に行われた。抜けるような青空は純一無雑な特攻烈士に似て、静かに流れる読経の声は遥かな歳月を思い起させるものがあった。参列者は遺族・戦友等四百余名だった。

祭　文

謹んで特別攻撃隊殉国烈士の御霊に申上げます

国運を賭けての戦であった大東亜戦争に於て英霊の皆様には当時弱冠十七・八歳から二十歳代の春秋に富むお年であられながら国難打開の為に肉親の恩愛等を断ち切って特別攻撃を敢行され身命を祖国に捧げ決然として散華されました。

当時皆様の誠忠遺烈により全軍将兵の闘魂烈々として燃え上り総ての国民は深く深く感動致しました。連合軍に於てもこの世界戦史に未だ見ざる日本民族の闘魂に驚愕多大の衝撃を受けたのであります。然しながら彼我の戦力隔絶し戦勢日に非にして遂に終戦を迎えたのでありました。

終戦より正に四十七年皆様の祖国日本は今や空前の復興発展を遂げましたことは之全く英霊皆様のご加護によるものであり私どもは一日も忘れることはできません。去る五月前会長竹田恒徳様が薨去され私は計らずも皆様の御推挙により特攻平和観音奉讃会の会長をお引受け致すことになりました。

本会は今後とも特攻烈士の御遺績を広く国民の皆様に知って頂きこの精神を正しく後世に伝えることが出来ますよう心から念願いたしております。

本日第四十一回特攻平和観音の年次法要に際しまして御遺族の方々を始め関係者相集い在天の英霊に深く敬弔の誠を捧げます。

特攻平和観音となられた御霊よ　我が日本の今後にご加護を垂れたまわんことを

平成四年九月二十三日

特攻平和観音奉讃会長　瀬島龍三

目　次

第41回特攻観音年次法要　1
会員の絵画展　5
阿部編隊の空母体当り　6
神州不滅特別攻撃隊　8
第一、第二御楯特攻隊の碑　9
菊水部隊天山隊　12
出撃直前までの手記　14
六月十一日の再会　16
B29体当り吉沢平吉中尉の碑　18
義烈空挺隊の油絵展示施設　19
慰霊祭二件　20
山縣大弐先生の絵とわが遺書　21
特攻随想（一）　22
会からのお知らせ　24

瀬島会長

追悼の辞（遺族代表）

本日ここに第四十一回特攻平和観音年次要法が執り行なわれるにあたり数多くのご遺族の方々を代表して特攻隊の御英霊に哀悼の情をこめ感謝の誠を捧げます

かの悲惨な大戦も終りをつげてすでに五十年近い年月がすぎましたがあの大戦で尊い犠牲となられた軍人軍属は実に二百三十万人に及ぶといわれています

最近あの戦争を体験した人達が月日とともに数少くなるにつれて国民の誰もが今の平和になれ親しんであの戦争が忘れ去られようとしておりますことは誠に遺憾千万といわざるをえません

ある方が「特別攻撃隊」その名は勇しく華々しいがこれ程悲しくいたましい名はないと書かれていますが弱冠二十歳前後の才能豊かな若者がその夢多き人生をすて決然として敵艦船施設に必死必殺の肉弾攻撃を敢行悠久の大義に散華した六千柱の御英霊に想いをいたすときその崇高無比な心情にうたれ感涙せずにはいられません

私の弟も昭和十八年九月に海軍飛行科予備学生を志願し翌十九年十二月十五日神風特別攻撃隊第一草薙隊々長として僚機とともにミンドロ島上陸敵艦船に体当り攻撃を敢行散華し烈士の一員に加えられここに奉蔵されております。今なお母は弟の戦死の公報が届いたときの驚きや遺品の一つも帰らなかったとき

特攻平和観音経

恭しく伏して惟んみるに、天地開闢以来、この世に生を享けしもの、幾十百千万億兆なるを知らず。

その間、同種相集い、同族相結んで国をなし、互に境を劃し、相互反目反噬してその国土の拡延を図り争奪して止まざること百千万劫なり。

就中、中世以来、西欧の諸列強は、善良盲昧の後進諸国を併呑し、もろもろの種族を圧伏して殖民の苦を与え、その野望の楽を取りぬ。世界の旧秩序即わち是れなり。

我が邦は、古来平和を以て八紘為宇の大理想となし、万邦融合の大理念を掲ぐること、ここに三千年、昭和の聖代に至り、世界に一大新秩序を齎らさんことを庶幾し遂に曠古の大戦となる。

一億同心。打ちてし止まんの豪気湯々、挙国戦務を努むるも、奈何せん、彼我の戦力隔絶し、戦勢日に非にして、大事将に去らんとす。

茲に忠勇無双の紅顔の烈士、自奮自励、九死に一生を期せず、特攻以て敵機、敵艦船を求めてこれを屠り、敵陣営の胆を奪う。その挙の壮烈にして、その果の偉大なる、全世界の瞠目するところなりき。然りといえども、遂に惨絶の敗戦に会す。我が邦無前の苦艱、ああやんぬる哉。

特攻烈士の挺身殉国の衷情を忖度すれば、人皆言辞を嚥み、熱涙胸宇に充つ。

それ人身は享け難く、その生を終るや難し

前漢の大史公司馬遷にこれを聞く一人固より一死あり。死或は泰山よりも重く、或は鴻毛よりも軽し。これを用うるに趣くところ異なるなり」と。

の悲しみを何時も語りあの子は心の優しい子であったと偲んでおりますが何れのご遺族の方々も散華された人達を想い生涯忘れられることはないと思います。

戦前列強諸国の植民地として苦しんでいた多くの国々が解放された独立国家として誕生したことや今日本が平和と限りない繁栄を続ける中で我々が日々豊かな生活を営んでいられるのはこれすべて大戦の尊い犠牲となられた人達によってもたらされたものであることを国民の一人ひとりが深く胸に刻みその御遺徳を後世に伝える義務と責任があります。あの悲惨な大戦を体験した我が国としてはあのような悲劇が二度と地球上に繰りかえされることがないよう世界の平和維持に最大の努力をしなければならないと思います。

ご英霊の深いご加護を賜りますようお願い申し上げあわせて御心安からんことをお祈りして追悼の言葉といたします

平成四年九月二十三日

戦没遺族代表　西村秀男

編者註　この追悼文は更に長文でしたが紙面の都合で一部省略させてもらいました。

追悼之辞（戦友代表）

梵鐘娟々として流れ清浄の気深々として漂う観音堂　特攻烈士の御霊ここに鎮り給うか

烏兎匆々諸霊と干戈の裡に別れしより半世紀を経ぬ　颯々たる英姿なお瞼に在り　朗々たる音吐なお耳朶に存す　我等既に老朽只管階前に頡づくのみ　君は明眸皓歯匂うが如き若武者なるに　我は白髪爛額覆うべきもなし

幽明の境越す能はずと雖も　懐いは結ぶ菅ての志　何れの日にか黄泉に相語る秋あるべきも　暫し我に余生を仮し給え　混濁の世になお語り伝うる責務ありと信ずればなり

諸霊が命捧げし祖国は　今や物豊かにして心貧しき世となりぬ　戦後教学の陵夷甚しく己ありて国存するを知らず　権利ありて義務存するを覚らず　要路の大官に至りては政権を私して社稷を思う心を失い　報道に任ずる者知能低く徒に奇を衒い公器を弄ぶ　名を平和に借りて靖国の神霊に報ゆる道を忘る　此の如くにして如何でか祖国の安泰期すべけんや　嗚呼我等茲に思い至れば　寧んぞ安閑たるを得ん　老耄の微力を振い英霊のみ心を世に顕彰するを残余の身の使命とせん　乞う照覧せられよ　茲に階前に佇みて微衷を捧ぐれば　感応の御心か香華の揺らぐを覚ゆ　御霊安らけく在しませ

平成四年九月二十三日

義烈空挺隊戦友　田中賢一

特攻勇士の諸霊は正に忠烈の亀鑑なり。諸霊が父母の恩愛を断ち、大忠、大孝、大義、大勇に徹せし崇高無比なる境涯に想到せんか誰れか万斛の涙なきを得んや。

老いも若きも泣き
男も女も哭き
草も木も、馬も羊も涙せん
玉も礫も悉く悲しまん
天地万象凡て慟きて止まざらん

唯、諸霊を慰め得るもの一つあり。宇内に無慮一百三十有余の独立国家の新秩序の出現これなり。

真に世紀の偉業。この赫然たるに匹儔するもの果して他にあらんや。

これ正に諸霊の志の顕現なり。諸霊の血の発露なり。諸霊や、大仁にして大徳、大勇にして大善なり。故に諸士の霊徳や無量なり。諸士の光顔や巍々たり。

諸士の威神や無極なり。

その威徳は月日と耀を争い、その勲績は末代永世に亘りて宇内に広宣流布せられんこと豈疑を容るるの余地あらんや。

嗚呼尊い哉　嗚呼仰がん哉　長存不滅の光

南無特攻平和観世音菩薩
南無特攻平和観世音菩薩
南無特攻平和観世音菩薩

東京都世田谷区下馬四丁目九番四号
世田谷山　観　音　寺
電　話（410）八八一一番

特攻観音年次法要における
在日トルコ大使館付武官
F・ギュウライ大佐挨拶

祖国のため勇敢に戦って尊い生命を捧げられた特別攻撃隊の将士の英霊に対し、謹んで申上げます

私は在日トルコ大使館付海軍武官フェリダン・ギュウライ大佐であります。私は特攻平和観音年次法要にご招待いただき、ここに参列できましたことを無上の光栄に思っております。なぜならば、特攻隊員は生還が期しえられないことを承知の上で、なお敢然として任務を遂行した軍人だからであります。即ちこれこそは軍人として最高の勇気ある戦闘行為だからであります。

私の宗教イスラム教においては、祖国のために殉じた人はまっすぐに天国に昇ると信じられており、その人は「シェヒット」と呼ばれてあがめられております。この言葉は「戦没者」と訳されておりますが、「靖国の神」というような特別の意味があります。

本日ここにお集まりの御遺族御友人の方々は、特攻隊戦没者の英雄的行為を常に誇りに思っておられることでありましょう。私共トルコ人の心も日本人の想いと少しも変りはないのであります。私たちトルコ人は、近代トルコ建国の父であり国民的英雄であるアタチュルクと同様に、東郷提督と乃木将軍に率いられて勇敢に戦った日本軍将兵のことを、今でも尊敬しております。私共は、この日本軍の伝統を継いで、先の大戦において勇敢に戦って散華された特攻隊員の偉業と功績を永久に忘れません。

最後にこの席にご招待いただきスピーチの機会を与えられました光栄に再度感謝しつつ、私の追悼の言葉と致します。

翻訳者上坂康（海兵75）

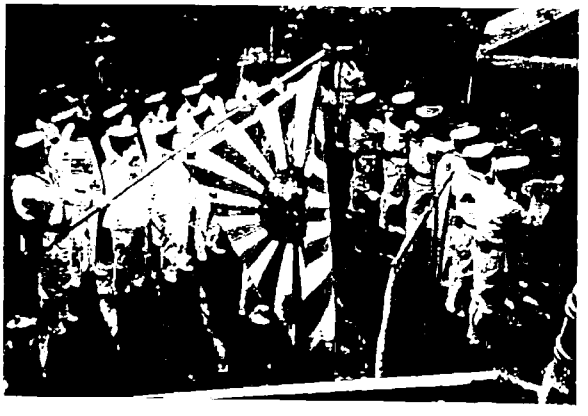
Captain Feridun GURAYの略歴
'49年生れ、'70年海軍兵学校卒業、'80海軍大学校卒業、'89年駆逐艦艦長、艦隊司令部参謀を経て本年8月に現職着任

（富嶽隊）　幸保栄治

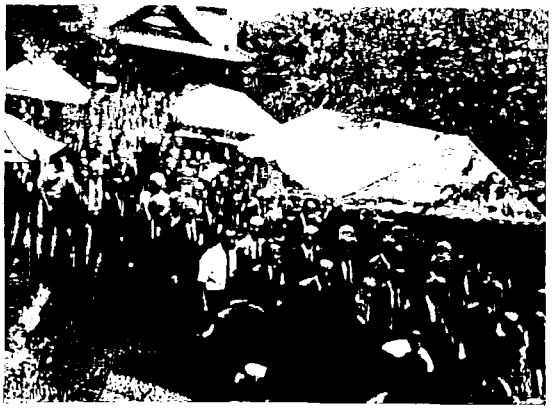
出で立てば還らざりしと知りつつも
已むに止まれぬ　大和魂

不詳

雲りなき心の月の　清ければ
千と世の秋も　さやけかるらん



海軍々装会ラッパ隊



焼香の列

顕彰会会員の絵画展

担当理事
伊藤直之
松本武仁

平成3年9月23日の世田谷特攻観音年次法要の際に第一回油絵展示会を行い、そのとき出品された絵の主なものは、会報15号にカラー印刷で紹介した。

更に平成4年3月22日靖國神社合同慰霊祭のときには、靖国会館の階段附近に約30点ほど展示したが、館内に入った者以外には見てもらえなかった。

平成4年8月15日に行われた英霊にこたえる会の慰霊祭と国民集会に、その付帯行事として同会と協力し、靖國神社参道に14 15 16の三日間展示した。特に15日には参拝者も多く、沢山の人の目に触れた。担当理事が交代で説明員として立会したが、観客に与える感銘は大きなものがあった。

出品者と出品点数	
西野弘二	2
谷　晃夫	2
伊藤直之	3
市川国雄	2
松本武仁	12
海法秀一	5
佐藤彰平	3
野崎慶三	1
中野友次郎	1
徳高光造	1
松江勝馬	1

第四回展示会（出品者と画題）
平成4年9月23日世田谷観音

伊藤直之カルカ　夕陸海軍協同作戦／ベンガル湾上空の12F／ラングーン陸軍航空　昆明爆撃、市川国雄回天出撃／敷島隊出撃　桜花突入、中野友次郎知覧出撃、野崎慶三長羊　松本武仁不威　遺書　犬とたわむる　鎮魂図　義列空挺隊突入　戦車特攻　賀谷中佐の最後／陸軍船舶特攻　徳高光造鎮魂賦、佐藤彰平（カラー写真）

精華特攻隊／73Fの無念／73F長　二隅輝雄少佐の奮戦、生田惇（肖像画）穴沢利夫少尉　荒木春雄少尉　伊舎堂用久大尉／長谷川実大尉　伊藤直之（肖像画）山本貞三軍曹／中村三郎中佐　久野正信中佐／健軍飛行場における久野正信中佐

阿部編隊の空母体当り

森松俊夫

私は防衛研修所の戦史編纂官をしていた頃、稲田正純中将から数回戦史資料の聞き取りをしたことがある。

あるとき、ふと話が横道にそれて「私が第6飛行師団長でマニラにいたとき、義弟の阿部と偶然めぐり会った。阿部は、現在自分は補充隊付だが、前線に出れるよう話して下さいという。私は、何も死に急がなくていい。機会がきたら絶対に体当りでゆけ。空母か戦艦はどうだ。艦の弱点は煙突だから、煙突目掛けて突っ込め、と話してやった」と語られた。

稲田中将の奥様が阿部信行大将の長女であることは知っていたが、私は航空のことは分らないし、そのままにしておいた。ただ煙突に突入の話だけは頭のどこかに残っていた。後年、機会があって調べてみると、義弟というのは、阿部大将の次男阿部信弘中尉（陸士56期生）のことで、一式戦3機の阿部編隊が、英機動艦隊に体当たりを敢行し、その3隻を撃沈破という偉功を樹てたことを知った。

丸川攻撃隊の進攻

阿部中尉は、山砲兵であったが陸士卒業時、航空に転じ加古川を経て第一野戦補充飛行隊戦闘隊付となった。この飛行隊は、テンガー飛行場で教育のかたわら、シンガポールの防空を担任していた。

昭和19年10月18日、英機動部隊が、カーニコバル付近現出の情報が入ったので、戦闘隊は、新進気鋭の士を選抜して攻撃隊を編成し、スマトラのメダンに進出した。

このころ、比島方面の風雲が急を告げ、国軍決戦の要域を比島方面とし、捷一号作戦が発動された。英艦隊の情況は不明であるが、米主力艦隊への注意をそらすための陽動と思われた。

わが攻撃隊は、攻撃隊長を第一編隊の丸川公一大尉（53期）が兼ね、第二編隊長垣尾勝中尉（55期）、第三編隊長阿部信弘中尉の各編隊3機、計一式戦Ⅱ型9機である。18日夜、丸川攻撃隊は翌払暁の出動を準備したが、隊員の間では、敵艦撃沈の方法等について話が盛んで、すでに敵を呑むの概が感じられた。

丸川攻撃隊は、19日9時、快晴のメダンを離陸、発進した。カーニコバル島の手前で、左下方に空母1隻を中心とし、計7隻が横隊となり東進するのを発見した。攻撃隊は直ちに増槽を投下し、各編隊高度差300米の横広隊形に移った。

眼下の英艦隊は猛烈な対空射撃を実施しつつ、一斉に回頭退避行動に移った。別の英艦隊の一群が、カーニコバル島を砲撃中であった。

このとき、攻撃隊とほとんど同高度の真正面に、横一線に散開した20機以上のボートシコルスキー機を発見した。太陽を背にした丸川攻撃隊は、やや有利な態勢で対進し、激しい空中戦が展開された。

この間、攻撃隊の阿部編隊3機が、敵艦目がけて突入した。

激闘約30分、攻撃隊は約11機を撃墜したが、攻撃隊も1機が撃墜され、3機が敵艦突入、3機が被弾不時着、2機は無事であった。

安部編隊の体当り攻撃

安部編隊の戦闘は、地上守備隊が目撃していた。現地の独立混成第36旅団情報記録によれば、

まず1機が超低空から空母目掛けて突入し、艦橋で自爆、艦は猛爆猛炎につつまれて轟沈。引き続き、1機が敵二番艦に自爆、艦尾に大爆発を生じ逐次艦尾より沈没、巡洋艦必死の救助作業をなすを望見さる。さらにわが戦闘機1機は、飛行場砲撃をやめ退避運動に入った敵艦の艦橋に自爆、敵艦は大火災を起こし南方に遁走。

と記している。

戦後、英大使館を通じて調査した結果「3機とも突入に成功し、1機は空母イラストリアス艦橋付近に激突、大火災を起こし黒煙を噴きつつ単艦で戦場を離脱、じ後、消火に成功して基地に帰投、修復ののち戦列に復帰した。また他の1機は大型駆逐艦に激突、大火災ののち同艦は沈没した。別の1機は駆逐艦に突入、同艦は真っ二つに折れ轟沈した」

ということである。

前記情報記録と英国側の調査結果では、若干の相違はあるが、爆弾を持たぬ戦闘機3機が挙げた戦果としては、絶大なものであることについては間違いない。

阿部編隊の壮烈な体当り攻撃は、神風特攻隊の第一陣が、比島から出撃する6日前であった。阿部編隊の戦闘と戦果は、すでに出撃中の比島の特攻隊に一機一艦必沈の大きな自信を与え、軍中央部と若者たちの感激を呼んだことであろう。

こののち、小型機による攻撃が、特攻の主流を占めるようになった。

天皇の御言葉

10月22日、木下敏第三航空軍司令官は、丸川戦闘飛行隊に感状を授与した。

同月27日、寺内寿一南方軍総司令官は、陸軍中尉阿部信弘、陸軍曹長寺沢一夫、陸軍軍曹中山紀正にたいし、感状を授与し、

戦闘機ヲ以テ敢然玉砕克ク右ノ戦果ヲ収メタルハ一ニ編隊長阿部中尉ヲ初メ寺沢曹長、中山軍曹ノ旺盛ナル責任観念ト熾烈ナル敢闘精神ノ発露ニシテ其ノ事ノ壮烈ニシテソノ功ノ偉大ナルコト正ニ軍人精神ノ精華ト謂フヘク全軍ノ亀鑑タリ

仍テ茲ニ感状ヲ授与シ之ヲ全軍ニ布告ス

と賞した。

この感状は、上聞に達するとともに、11月18日付それぞれ二階級特進が発令され、特旨をもって叙勲の御沙汰を拝した。

なお、留守宅では、木戸幸一内大臣から弔問の手紙を受けた（昭・19・10・25付）。その一節に次のように書かれている。

昨日拝謁の際、すでに梅津参謀総長より委曲上奏相成り居りたるものと相見え「朝鮮総督の阿部の息が、体当りして戦死した。非常に勇敢な、しっかりした将校だったそうで、中尉だったが、惜しいことをしたね」

との御言葉を拝し、真に有難奉存候

この手紙を受けた母堂は、一生の光栄として、息子の死所を得たことを、終生の喜びとされていた由である。

阿部中尉は、10月19日の出撃前、機付兵を呼び、葉書2通の発信を依頼した。18日夜書かれたものか、シンガポールでしたためたものであるかは分からない。そのうちの1通には、つぎのように記されている。

拝啓ソノ後　御無沙汰致シマシタ貴地　（注・父君は当時、朝鮮総督として在京城）　最早　御寒キコト存シマス　内地ト異リ　追々　冬トモナレハ寒気ハ殊更ト思ヒマス呉々モ御身体御大切ニ（中略）

大和民族ノ靭強ナル粘リヲ表ハスハ今ト　更ニ更ニ充分覚悟ヲ固メ当分　貴地　或ハ兄上姉上トノ間ハ打切リノ積リトナシ　屍ヲ敵大型機或ハ大型艦ト共ニ散ラサン迄ハ　今後ノ御無音御許シ下サイ

悠々　世界地図ヲ観スルノ時　皇御楯ノ先駆トナリ　遙カ幾万里ノ彼方迄　見敵必殺ノ闘魂ヲ沸ラセツツ戦フ身上　誠ニ無上ノ歓喜ト光栄ヲ覚ヘマス

如何ナル難局ニ遭遇スルモ　神州不滅ヲ信シ　戦ヒ闘ヒテ勝チ抜ク将兵ノ現存スル以上　何百年ヲ経ルトモ　コノ戦ハ必ス勝チマス（以下略）

これが絶筆となった。

「屍ヲ敵大型機或ハ大型艦ト共ニ散ラサン迄ハ今後ノ御無音御許シ下サイ」との言葉は、重大決意を淡々と述べているだけに、切々として胸打たるるの感がする。

阿部信弘少佐が士官候補生のころ

雄健の神の御前に身を励み
いざ尽くさなん武夫の道

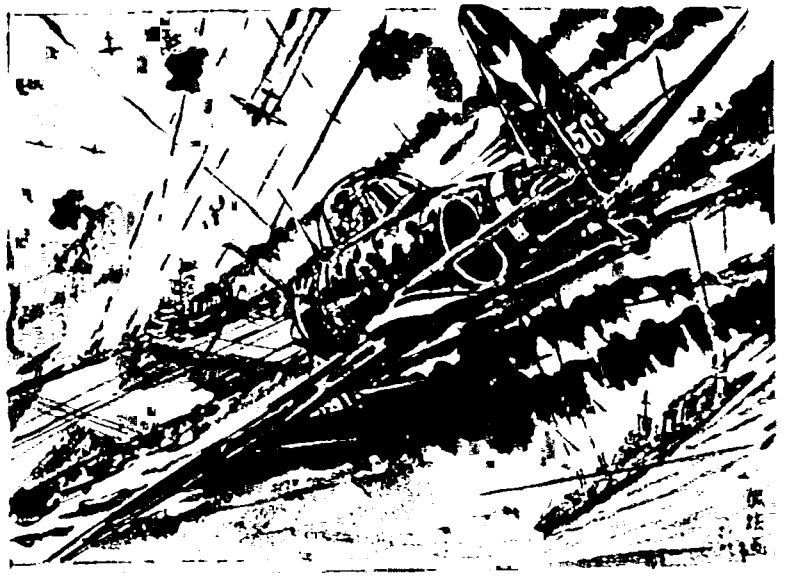
（昭和17年11月、56期生会誌より）

と詠んでいる。当時としては皆の抱く思想であるが、文才の片鱗がうかがわれる。

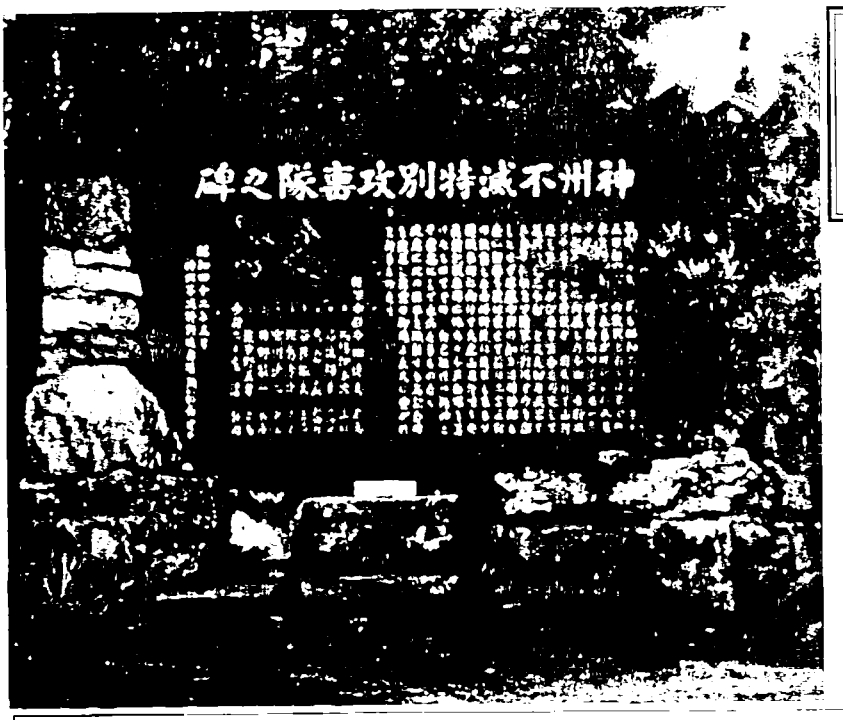
写真を見ても、父君のような丸顔でなく、眼と口が大きい。

稲田中将夫人の談によると、末子でのんびりしていたが、はっきり物を言うし、心の中には烈しく厳しいものを抱いていたものと思う。阿部家の墓所は京都大徳寺内にあり、信弘もそこに眠っている。先般、丸川隊長が、カーニコバルで戦死した部下4人のため、富士霊苑に鎮魂碑を建てて下さったので、お参りを続けている。丸川隊長にはいろいろお世話になっています、と。

（小飛会　海法秀一画）



神州不滅特別攻撃隊



世田谷特攻観音堂の左側樹木に覆はれてこの碑がある。この特攻隊は正式に編成されたものでなく、この人々が申合せて自発的に出撃したのであって、しかも終戦後のことでもあるし、一般には殆んど知られていない。先づ碑文を転記してみる。文字の配列は原文の通り

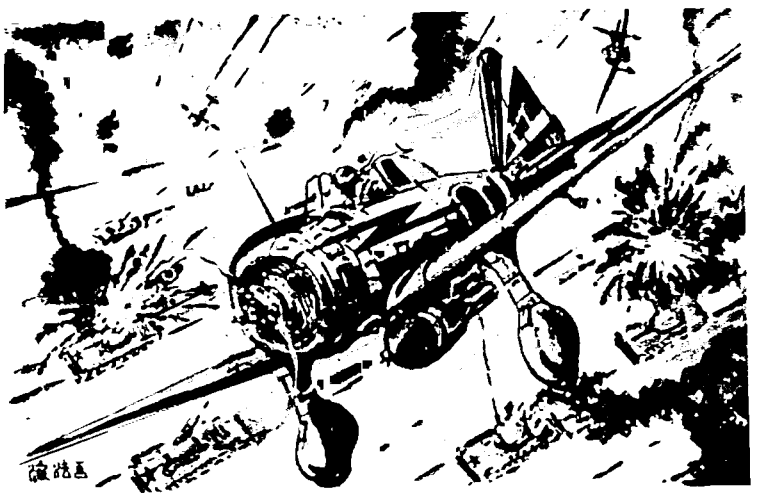
第二次世界大戦も昭和二十年八月十五日祖国日本の敗戦と云う結果で終末を遂げたのであるが終戦後の八月十九日午後二時当時満州派遣第一六六七五部隊に所属した今田均少尉以下十名の青年将校が、国敗れて山河なし生きてかひなき生命なら死して護国の鬼たらむと又大切な武器である飛行機をソ連軍に引渡すのを潔しとせず谷藤少尉の如きは結婚間もない新妻を後に乗せて前日二宮准尉の偵察した赤峰附近に進駐し来るソ連戦車群に向けて大虎山飛行場を発進前記戦車群に体当り全員自爆を遂げたものでその自己犠牲の精神こそ崇高にして永遠なるものなり

此処に此の壮挙を顕彰する為記念碑を建立し英霊の御魂よ永久に安かれと祈るものなり

陸軍中尉	今田　達夫	広島
〃	馬場伊与次	山形
〃	岩佐　輝夫	北海道
〃	大倉　巌	北海道
〃	谷藤　徹夫	青森
〃	北島　孝次	東京
〃	宮川　進二	東京
〃	日野　敏一	兵庫
〃	波多野五男	広島
陸軍少尉	二ノ宮　清	静岡

昭和四十二年五月
神州不滅特別攻撃隊顕彰会建之

この人達の所属部隊は第五練成飛行隊で、機種は九七戦だった。碑面氏名の上部に九七戦の絵が刻まれている。



小飛会　海法秀一画

第一、第二御楯特別攻撃隊と硫黄島摺鉢山にある碑

ここには海軍の第一御楯特別攻撃隊の碑と第二御楯特別攻撃隊の碑が並んで建ってる。向って右の碑は正面に第一御楯特別攻撃隊、左側に陸軍重爆隊、右側に海軍中攻隊と刻まれている。

両碑の中央に次のような一文を刻んだ碑が建っている。

昭和十九年六月、米軍はサイパン島占領後十月には同島にB29を展開して、日本々土の爆撃を企図した。

これに対して我軍は十一月初めより年末近く迄陸海軍の大型機が本土より発進して、十一回に亘り延七十三機が夜間爆撃を繰り返したが、米軍側の対応措置強化に伴い我が方の損害急増し遂に三十四機が未帰還となり、これに伴う搭乗員の損耗も甚大となった。

唯この間十一月二十七日朝本島を発進して彩雲二機に誘導された零戦十二機がサイパン飛行場のB29に対し白昼銃撃を敢行し、米軍の心胆を寒からしめたが、これ即ち第一御楯特別攻撃隊である。

斯る戦勢に鑑み米軍は速やかに硫黄島を奪取する必要に迫られ、昭和二十年二月大挙攻略軍を編成して侵攻し来たのである。これに対し我が方は第二御楯特別攻撃隊が大戦果を挙げる一方、島上に於ては月余に亘り約七万の彼我攻防軍が苛酷な戦闘を続けたが、当時大本営宛報告電の一節に「本戦闘の特色は、敵は地上に在りて、友軍は地下に在り」とあり、よく戦闘の様相を表わしている。

今この山頂に立ち四個の碑石を眺め更に俯瞰して道標を辿り当時の戦闘を偲ぶ時、その由来を判然と識ると共に、雲濤千里海陽沈む情景に思いを馳せ傍沱合掌する次第である。

第一御楯特別攻撃隊

戦史叢書「本土方面海軍作戦」の該当部分を転記する。

十一月六日早朝局地偵察のため硫黄島を発進した偵察機のうち、ダァムに向かった一三一空偵一二の彩雲は天候不良のため途中から引返したが、陸軍教導航空軍の百式司偵が一二〇六帰着してサイパン、テニアンの状況を次のとおり報告した。

一　目標附近雲量　五～六

二　「アスリート」大型機約四〇（掩体中）
　　「オレアイ」　小型及中型機三〇～四〇
　　「チャチャ」　小型機数十機

三　「テニアン」　小型多数　其ノ他雲ノ為偵察不能
　　「サイパン」　港内巡洋艦十数隻　港外大型艦三、小型数艦

一六二〇ころ攻七〇三の一式陸攻七機、陸軍教導航空軍の重爆五機、百式司偵六機が硫黄島に到着、攻撃準備のうえ二〇一〇から翌七日〇〇三〇の間に発進して、マリアナ攻撃に向かった。

この日少なくとも陸攻五機がテニアン及びサイパンの米基地を攻撃しているが、夜戦多数の邀撃にあって戦果を確認していない。攻撃から帰還した各機は同日一式陸攻は木更津へ、重爆、百式司偵はそれぞれ浜松と八街（千葉県）に帰着した。

このあと偵一二の彩雲によるダァム（十七日）及びサイパン（二十三日）に対する偵察が続けられ、写真及び目視による偵察の結果ダァム島に多数の大型機が所在するのを確認したが、サイパン島の状況は天候不良あるいは航空機故障のためつかめなかった。

注　偵一二は十一月十五日付で一三一空から除かれ、七五二空に編入された。

このような状況のもとにB―29の撃滅を命ぜられていた三航艦では、これまでの陸攻による攻撃にあきたらず、戦闘機隊の銃撃による強襲を十一月十六日ころから計画し、館山基地においてこの攻撃に参加する戦闘機隊（第一御楯特別攻撃隊）の挺身攻撃訓練を実施していた。

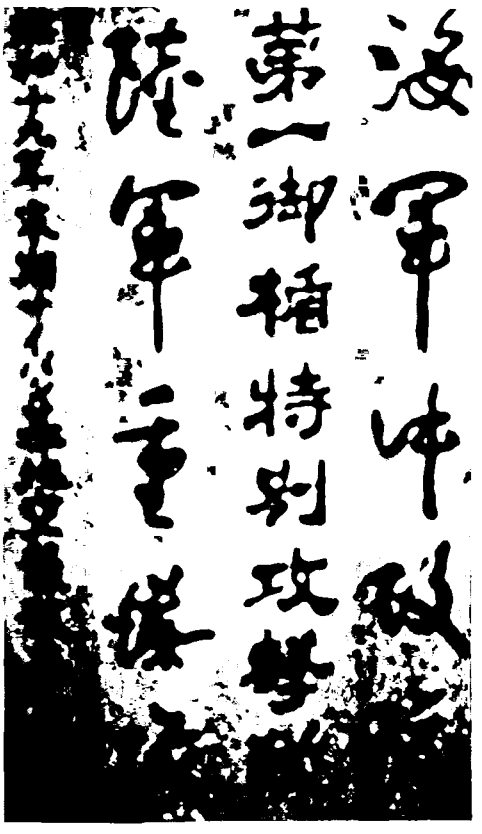
十一月二十六日、第一御楯特別攻撃隊の零戦一二機及び七五二空の彩雲二機が硫黄島に進出して、翌二十七日〇八〇〇同島を発進サイパン攻撃に向かった。この日サイパンからは八一機のB―29が二回目の東京爆撃に発進しているが、基地にはなお多数のB―29が残されており、戦闘機隊は正午過ぎから米飛行場を襲撃したものと思われるが、攻撃に参加した戦闘機は全機帰還していないのでその状況は不明である。しかしながら不意の強襲によってアスリート飛行場が混乱している状況は、米側電話の傍受によって判明した。我が攻撃隊は極く低高度で飛行場に進入して、B―29に対して繰返し銃撃を加えており、飛行場にあったB―29四機が破壊され六機が大破した。

また前夜おそく硫黄島を発進した陸軍の四式重爆三機は、二十七日〇〇〇七～〇〇一〇の間アスリート飛行場南半部に対する奇襲に成功したと記録されている。

十一月二十八日には、グァム島攻撃を予定して同日硫黄島に進出した攻七〇四の一式陸攻一二機をもって、サイパン第一飛行場所在のB―29を攻撃することとなった。これらの陸攻は目標到達の約一時間前から、単機で進撃して緩降下接敵、水平爆撃を試み、〇〇二〇から〇二〇五の間に飛行場及び艦艇を攻撃した。

第一御楯（零戦11機）

中　尉　大村　謙次
飛曹長　小野　康徳
上飛曹　北川　磯高
一飛曹　住田　広行
一飛曹　東　進
一飛曹　加藤　正人
二飛曹　司城　三成
飛　長　新堀　清次
飛　長　上田　祐次
飛　長　高橋　輝美



左の写真は第一の碑の四面を写したもの

飛長　明城　哲

第二御楯特別攻撃隊

戦史叢書「沖縄方面海軍作戦」に掲載されている該当部分を転記する。

二十年二月十六、七日の米機動部隊の関東地区空襲に際しては、三航艦は、搭乗員の練度の上からいっても、聯合艦隊の命令の点からも、敵の跳梁を黙視するほかなかった。それで、航空部隊の間には特別攻撃を必要とする機運が高まり、三航艦長官寺岡謹平中将は六〇一空司令杉山利一中佐に特別攻撃部隊の編成を命ずるに至った、司令は直ちに部下部隊から特別攻撃隊を編成し二月十九日、長官は「第二御楯特別攻撃隊」と命令した。

その編成は村川弘大尉を隊長として次のとおりであった。

第一攻撃部隊　戦闘機隊四組　艦爆隊四組
第二攻撃部隊　戦闘機隊四組　艦爆隊四組
第三攻撃部隊　戦闘機隊四組　艦爆隊四組
第四攻撃部隊　艦攻隊四組
第五攻撃部隊　雷撃機隊四組

こうして、編成された特攻隊は、二月二十一日朝、香取基地を発進し一旦、八丈島に着陸して補給のうえ、正午ころから逐次発進して夕刻硫黄島周辺に到着、体当たり攻撃を行なった。「米海軍作戦年誌」によると、先に一部述べたように、護衛空母ビスマルク・シーは沈没、空母サラトガ大破、護衛空母ルンガ・ポイント、防潜網輸送艦キオクク、LST（戦車揚陸船）四七七、LST八〇九の四隻はいずれも特攻機の命中により損傷している。

その他、二月十八日、天山二機で特別攻撃を行ない、駆逐艦ゲーンブルと高速輸送艦グレスマンが損傷している。その後、陸攻二ないし六機で三月九日までに合計七回延二六機で夜間攻撃を加え、その間には陸軍の重爆も数回夜間攻撃を行なっている。これらの戦果については「米海軍作戦年誌」では駆逐艦一隻の他、それと明らかには誌されていない。本作戦で全軍に布告された村川大尉以下四五名は次の通りである。

機密聯合艦隊告示（布）　第九二号

神風特別攻撃隊第二御楯隊

攻撃第一飛行隊長兼分隊長　海軍大尉　村川　弘
攻撃第一飛行隊附　海軍中尉　飯島　晃
攻撃第二五四飛行隊附　同　桜庭　正雄
戦闘第三一〇飛行隊附　同　茨木　速
攻撃第二五四飛行隊附　海軍少尉　佐川　保男
攻撃第一飛行隊附　同　木下　茂
攻撃第二五四飛行隊附　同　中村吉太郎
攻撃第一飛行隊附　海軍飛行兵曹長　原田嘉太男
攻撃第二五四飛行隊附　海軍上等飛行兵曹　小島　三良
攻撃第一飛行隊附　同　石塚　元彦
同　小石　政雄
攻撃第二五四飛行隊附　同　村井　明夫
戦闘第三一〇飛行隊附　同　志村　雄作
攻撃第二五四飛行隊附　同　岩田　俊雄
攻撃第一飛行隊附　同　青木　充孝
同　牧　光広
同　小松　武
同　中村伊十郎
攻撃第二五四飛行隊附　同　窪田　高市
攻撃第一飛行隊附　同　小林　善男
同　幸松　政則
同　小山　照夫
同　戸倉　勝二
同　下村千代吉
戦闘第三一〇飛行隊附　海軍一等飛行兵曹　森川　博
攻撃第一飛行隊附　同　三宅　重男
同　池田　芳一
同　大久保　勲
同　田中　武夫
攻撃第二五四飛行隊附　同　原口　章雄
同　稗田　一幸
同　鈴木　辰蔵
攻撃第一飛行隊附　同　伊藤　正一
攻撃第二五四飛行隊附　海軍二等飛行兵曹　清水　邦夫
同　叶　之人
同　信太　広蔵
同　川原　茂
同　竹中　友男
戦闘第三一〇飛行隊附　同　長　与走
攻撃第二五四飛行隊附　同　小山　良知
戦闘第三一〇飛行隊附　同　北爪　円三
攻撃第二五四飛行隊附　同　和田　時次
戦闘第三一〇飛行隊附　同　岡田　金三
攻撃第一飛行隊附　同　水畑　辰雄
同　海軍飛行兵長　川崎　直

菊水部隊 天山隊

菊水部隊天山隊

世田谷観音寺の境内、特攻観音の堂宇の向って左後方木立の蔭にこの碑がある。碑文は次の通り刻まれている。

大東亜戦争末期昭和二十年四月六日鹿児島県串良基地進発沖縄周辺に来寇中の敵機動部隊に体当り攻撃を敢行し戦艦五隻空母二隻及艦種不詳三隻を轟沈或は大破し多大の戦果を挙げ全員散華せり

神風特別攻撃隊菊水部隊天山隊員

攻撃第二五一部隊　海軍少佐　斉藤　緑郎
同　同　吉岡　久雄
同　海軍大尉　武下　明
同　海軍少尉　山下　武雄
同　同　原　敬治
円　同　嘉戸　乞
同　同　高山　要
同　同　牧島　浩二
同　同　高島　知善
同　同　田辺　実
同　同　岡　和夫
同　同　豊田　誠
同　同　堤　勉
同　同　野田　栄
同　同　太田　末広
攻撃第二五四部隊　海軍大尉　熊沢　庸夫
同　同　山村英三郎
同　同　桝見　良雄
同　同　植島幸次郎
同　海軍少尉　萩原　武
同　同　野口　吉正
同　同　望月九州男
同　同　田中　和夫
同　同　川添多喜男
同　同　大倉　由人
同　同　飛田与四郎
同　同　河瀬　厚

菊水一号作戦

陸海軍航空部隊は敵が沖縄に侵攻して来たら、九州と台湾の内懐に敵を包むという有利な熊勢を生かし、特攻を主体として敵艦船を撃滅する計画だった。陸軍の第六航空軍が聯合艦隊の指揮下に入ったので、聯合艦隊は第五航空艦隊と第六航空軍をもって敵艦船の攻撃を行い、これに台湾にある第八飛行師団が加った。

敵が沖縄に上陸したのは4月1日である。我が航空は五航艦を主にしてそれまでも敵艦船に対する特攻攻撃を行っていたが、展開の遅れから総力を挙げての第一回の総攻撃は4月6日から行はれた。これを海軍は菊水一号作戦と呼んだが、陸軍では第一次総攻撃と称した。4月6日に突入した特攻隊は次の通りである。（　）内は出撃基地と機種、機数。

《九州方面からの海軍航空》　菊水部隊天山隊（串良、天山九機）、第三御盾天山隊（串良、天山一機）、第一八幡護国隊艦攻隊（串良、97艦攻一四機）、第一護皇白鷺隊（串良、97艦攻一三機）、第一正統隊（国分第二、99艦爆一〇機）、第一草薙隊（国分第二、99艦爆一三機）、第一八幡護国隊艦爆隊（国分第二、99艦爆一五機）、第百二十部隊彗星隊（串良、彗星七機）、第三御楯二百五十二部隊（国分第一、艦爆五機、彗星五機）、第三御楯六百一部隊（国分第一、彗星一機）、第一神剣隊（鹿屋、爆戦一六機）、第一筑波隊（鹿屋、爆戦一七機）、第一七生隊（鹿屋、爆戦一二機）、第三建武隊（鹿屋、爆戦一八機）。

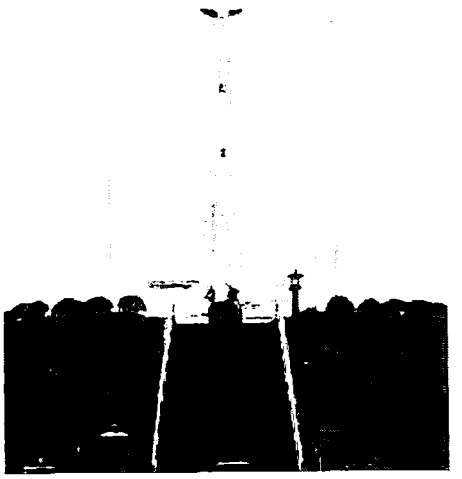
《台湾方面から海軍航空》　忠誠隊（新竹、彗星三機）、勇武隊（台南、銀河三機）。

《陸軍航空》　第一特別振武隊（都城西、四式戦八機）、第二十二振武隊（知覧、一式戦二機）、第四十三振武隊（知覧、一式戦五機）、第四十四振武隊（知覧、一式戦四機）、第六十二振武隊（万

世、99襲四機)、第七十三振武隊(万世、99襲一二機)、誠第三十六飛行隊(新田原、98直協一〇機)、誠三十七飛行隊(新田原、98直協九機)、誠三十八飛行隊(新田原、98直協七機)。

4月6日の航空特攻戦没者は、海軍二七九名(一六二機)、陸軍六一名(六一機)となっている。海軍の特攻に対する凄じい意気込みが窺える。主題の「菊水部隊天山隊はその中の一隊である。

戦艦大和による水上特攻が行はれたのもこの日である。菊水一号作戦は8日まで行はれたが、戦力涸渇して三日間で一先ず終る。



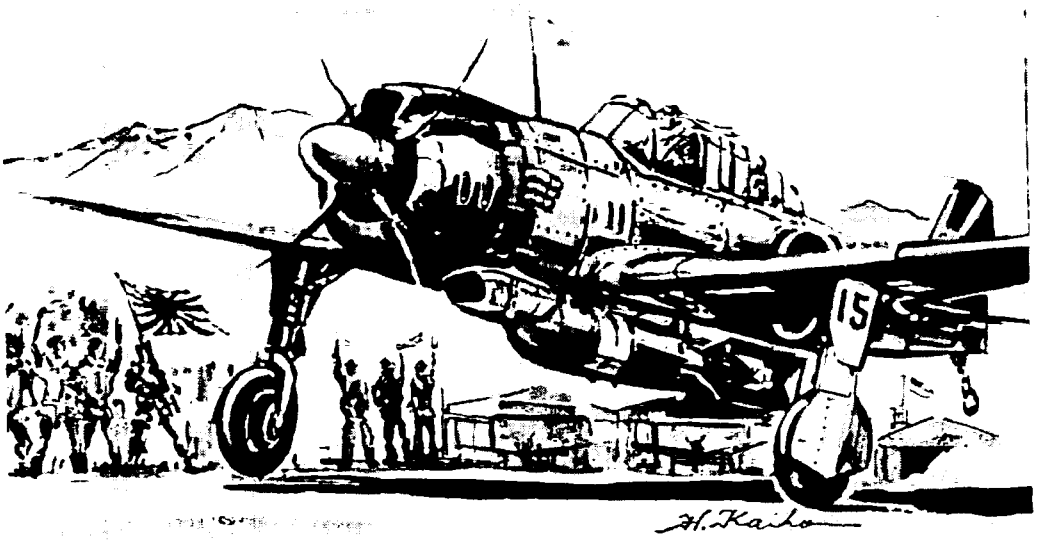
串良特攻基地の碑

所在地　鹿児島県肝属郡串良町　平和公園内

建　立　昭和44年10月11日

天山隊串良基地発進

少飛会　海法　秀一　画



特攻機の突入を辛じて避けた空母ペローウッド

出撃直前までの手記

第64振武隊　伍長　森　高夫

この記事は「少年飛行兵第十三期生の歩み」に掲載されたものであるが、ここに転載する。森伍長は九九襲に搭乗し20年6月11日万世から沖縄近海に出撃して散華している。　少飛会

昭和二十年四月二日

特攻に行く。お父さん、お母さん、親類、否村中、郡中の皆さん、これを良く読んで私の愉快なところを知って下さい。（省略）

五月二十七日

明日は原町飛行場を出発の予定である。原町は実に感じのよいところである。家族の方をはじめ町内の方の絶大なご厚意により、毎日を愉快に暮らすことができた、ただ感謝あるのみ。

五月二十八日

出、原町、今日は天候も非常に良い。これも神仏のしからしめるところなりと深く感謝すると共に、期待に立派に答えんと心に銘記す。

松浦の叔父さんには色々とお世話になりました。ではお元気で、高夫もやります。誓って。

出発準備完了。余裕綽々たるところで一筆申します。人生は余裕こそ大切です。出撃の時に余裕がもてるように今より心掛けています。

今の心境は、小学校時代の修学旅行に行く朝と同じで、常に童心に立ちかえって、楽しい期待でいっぱいです。

五月二十九日

全国的に快晴で無事大阪に到着す。原町出発時は自分が出発するような気がしなかった。淳子さんが一生懸命見送ってくれた。

途中の航法中は眠かった。腹が空いたので餅を一つがぶりつく。大阪の飛行場に着いた瞬間から原町が恋しくなった。原町は実に気持ちのよい町であった。第二の故郷のように。

五月三十日

お父さんお母さんが面会に来てくれた。今日は天候不良のため出発出来ない。稲垣少尉、斎藤軍曹はいまだ帰隊されない。何事をするにも全員がそろうことが必要である。

五月三十一日

大阪を出発す。お父さんお母さんと最後の別れと、思いきり翼を振る。地上では小さい姿が別れを惜しんでハンカチを振っており、真剣な姿である。無の境地であった。

六月一日（佐賀）

出勤、学科を受ける。我々は常に軍人勅諭を奉体し、軍人たることを忘れてはならない。

六月二日

整備を実施す。

六月三日

基地において始めて訓練を実施した。

六月四日

小隊教練を実施す。

六月五日

整備を実施す。

六月六日

雷雨のため演習を中止する。ぬれ鼠になってしまった。

六月七日

福岡、博多に遊ぶ。

六月八日

敵機来襲のため演習は行なわなかった。

九州に来てから慰問が多く慰問にくたびれた感じである。しかし、我々は常に若い。我ながら酒をよく飲むようになった。一升は軽くぐいっとやるからね、酒をのんだら私が一番愉快らしい。轟沈（酔いつぶれ）したこと実に六、七回。しかし、常に演習は休まず厳粛だった。

大阪でお父さんを乗せたときは本当に親孝行したような気がした。お父さんも一生のよい思い出となることでしょう。あのときは山火事なんかを上空から見ましたね。小学校にも急降下をしましたね。お父さんはにこにこして驚異の目をみはっておりましたね。

赤、青の若い乙女よりのハンカチが沢山集まった。また、人形もあるはあるは、一緒にみんな沖縄の空へ連れて行こう。

六月九日

本日、佐賀県目達原飛行場より、最前線基地鹿児島県万世飛行場に出発す。

愛機の翼の下で出発前にこれを書す。我が愛機はよく動いてくれる。感謝にたえない。本日晴天なり。地方の方々が我々の見送りのため来ておられる。

お父さんお母さん喜んで下さい。高夫御国のために咲く時期が近づいてまいりました。日の丸の旗が防空壕の上に春風にひらめいております。

やるぞ、男の意気で、近々、長くとも二、三日のうちにやれるぞ、気がせいせいする。しかし、立派にやらねばならぬと若干気になるが、全心全霊を傾け、心を無にすれば間違いないと信ずる。春風までが我々にやってくれよ

と頬を心良くなでて行く。誓って皇国の盾になる覚悟。出発十五時、十六時到着。

無事出撃飛行場に到着した。目達原では教官を始め色々御世話になった。美子さんから出発間際に花束をいただき実に感謝にたえない。桜島も噴煙煙霧でぼうっとしていたが、我々の幸福を祈る如く見えた。

飛行中は敵機の攻撃を考慮して一生懸命索敵したが敵機は認められなかった。万世飛行場に着陸したところ空襲警報の最中であった。本当に前線だ。

旅館の毛布の上で一筆する。出撃は明日か明後日と思う。あと四、五十時間の命である。しかし、私はこれあることを今まで期待に期待をしているをもって喜びにたえないのである。

六月十日

飛行場に出勤する。飛行場北端の丘でこれを書く。晴天で一点の雲もない。

七時四十七分空襲警報、出撃は今夜か明日か、地方のサイレンがさわがしく鳴り渡る。枇杷のおいしかった福島のあたりとは二、三カ月気候が違う。

敵さんはしつように上空を旋回中で再び空襲警報となる。池のほとりに蜻蛉がうれしそうに水にたわむれている。彼にはこの空襲もなにも知らないことであろう。敵機の爆音はそれ程しない。爆撃もしていない。

戦友はあの世の話をしている。聞いてると実に愉快な話である。竜宮のお嬢さんの話をしているんだから、英雄色を好むも無理はないなあ、我等国華隊は実に愉快な奴ばかりだ。隊長も磐としているが時々童心を出すからね。

気候も若干暑い。池が目の前にあり水泳をしたいような気がするが、やって見ればまだ寒いことだろう。あと二、三十時間もすれば、沖縄沖の海洋でざんぶり飛び込めるから、それを楽しみに今日は泳がないことにする。

（省略）

同日十三時三十分

腹が空いたので地下食堂に行き食事をする。美しい娘が居て竜宮に来たような気持である。

こんなに愉快で元気潑剌としているものが、明日の夜には此の世の人ではないと思うと不思議な気もし、人生の変転の妙に感慨深いものがある。

我々の隊長が今日陸軍大尉になられた。「一夜（生存中）の陸軍大尉だがこのあたりのあやしげな大尉や少佐に敬礼せんぞ」と冗談を言っておられる。

人間死を超越したなら、本当に毎日を愉快に大胆に思い切って出来るものとつくづく身に感じた。

今から攻撃の最後の作戦を錬る。

（十四時三十六分）

同日十六時四分

学科を受けて攻撃精神大いに昂揚した。（一部分文章判読できず）

糞落着き、これは私が幼いころより関心をもっているところである。攻撃は一身一瞬のことである。二十一年間の汗の努力を一瞬に集めて米英艦船をやっつけよう。私の心は童心に帰っており、その道は二十一年間における父母恩師教官の汗が私の心に染みて一矢に突入する覚悟。

お父さんお母さん自分は幼いころからなんでも他人より大きい方が好きでした。二十歳になってもやはり大きい奴をやっつけます。

でかいのを轟沈誓ふ

幼心の汗の玉（十七時）

同日十七時九分

天井の窓を見れば青葉の土手が見える。ここは先程から居る半地下室である。早くやっつけたいばかりに興奮して汗が流れる。

同日二十時

慰問演芸を見る。可愛いお嬢さん達が我々軍人のために一生懸命に舞ってくれた。十一時半、宿まで一里程のところを歩いて帰った。二日目に風呂に入りさっぱりした。明日の戦力を貯えるため眠る。（〇時半）

六月十一日

七時四十五分、朝食を終って床の上で一筆記す。今夕攻撃か？

九州の言葉特に鹿児島の言葉は判らない。私の機体の整備員は山田傭員である。山田は私と共に本当によく頑張ってくれた。家からも感謝して下さい。

同日十二時

命令遂に下る。最後の用便もした。心も落ち付いた。立派に生きん。

同日十二時十四分

丘の上で春風にさらされながら一筆記す。今日はむし暑く雲若干あり、攻撃には好機会である。

この日記と共に財布をお送り致します。

内金　二三〇円二〇銭也

これは秋子さん桂子さんの学資にして下さい。

印鑑　二個

同日十四時

いよいよ出発です。お父さんお母さんお元気でね。今夜の七時半には家に帰ります。出発は十七時、二時間半にて到着。誓う轟沈。

思う心思う心

ただ思う心は

立派に三千年の

皇紀に生きること

出撃といえども何んも感じない。興奮はない、ただ嬉しいやら、やるその精神に燃えているのみだ。だからこんなにのんびりと日記が書ける。本当に自分の死には冷静であって、永遠の国に旅立つのであることを思うと本当に晴れやかな気持ちである。

ではお父さんお母さんまた皆々様高夫は行きます。

国華隊森伍長は行く

我は喜び勇み轟沈そ

出発寸前これを機付に頼む

最後の高夫がここに香う

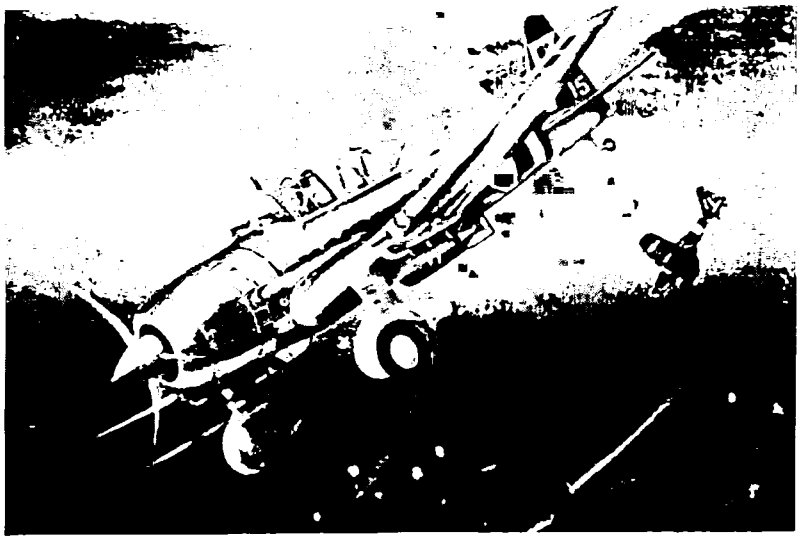
行きます

プロペラが廻りました

今行きます

ではさらば

註　日記はここで終っている。機付に手渡して発ったのであろう。



少飛会　海法　秀一画

（前列向つて右より）井上伍長　橘　軍曹　稲垣少尉　渋谷中尉　巽　少尉
横田伍長　（後列）岸田伍長　森　伍長　鈴木伍長　斎藤伍長　加藤伍長

六月十一日の再会

飯田　佐次郎

カレンダーの六月十一日の枠の中に「靖國神社」と書き入れてあるのに気がついたのは五月になってからでした。カレンダーは上が風景画で下に二カ月分の日付が印刷されているありふれたものです。六月十一日に靖國神社へお詣りを知らせて下さったのですが、誰から何日頃連絡を頂いたのかすっかり忘れて、カレンダーを見上るばかりで思出せません。靖國神社の慰霊祭、特攻観音の法要で会った方々を思出しても結びつきません。カレンダーを見て考えている中に五月はすぎて六月十日の夜になって仕舞ったのです。ふと年賀状に慰霊祭で会いましょうと書いた事がありましたのを思い出しました。直に今年頂きました年賀状の添書を一枚一枚読み直しをはじめました。

福島市の高橋圭子さんの年賀状は美しい絵入りで添書がありました。

賀正　「開戦五十年昔日を思うことしきりの此の頃です。六月十一日は靖國神社にお詣りします。お身お大切に」

六月十一日高橋さんは福島市からの

お詣りなので、遺族会の団体バスか新幹線利用でも靖國神社到着は午後と思いまして、午後一時すぎに靖國神社に行き拝殿で参拝してから、祭儀所の受付で私は「今日の午後福島県の団体のお詣りはございますか」と聞いたら「今日は山形県の遺族会のお詣りはありますが、福島県からのはございません」との返事でした。ああ、矢張り昨夜の中に高橋さんに電話しておけばよかったのにと後悔したのですが「では高橋圭子さんと云う方のお詣りはありませんか。福島市からのお詣りで高橋圭子さんなのですが」と云った丁度その時、奥から受付に用事で戻って来たご婦人に私の声が聞えたのでした。「高橋さんお詣りに来ますよ、今朝福島から参拝に間に合う様に必ず行きますとの電話がありました」の声がありました。余りにも偶然の巡り合せに一瞬驚きました私ですがこの幸運にも有難いと思い、ご婦人と控室に向って歩き乍ら、高橋さんとは特別攻撃隊の慰霊祭で今迄何回か会っていた事や、今日は年賀状で六月十一日のお詣りと知らせがあったので靖國神社へお詣りすれば会えるだろうと思って来た事を手短かに話をしました。

控室には六月十一日は沖縄で第六十四振武隊特攻戦死の命日なので隊員遺族の永代神楽奉納で揃ってお詣りとの事で、高橋圭子さんとは隊員が原町で訓練中に高橋さんの生家である松浦家を宿舎にしていたので、その縁でいろいろお世話になってましたとご婦人からのお話でした。

昇殿参拝の時刻は来まして手水を使い、お祓いを受けて本殿に上りました。仕女の神饌のお供えもはじまったのに高橋さんの姿は見えません。間に合わないかと心配して、時々階段の方を見ていたら高橋さんが一人でお祓いを受けているのが見えました。

御本殿には斎主の祝詞は恭しく奏上されて琴の調べと共に、仕女の英霊をお慰めする舞も美しく奉納されました。次いでご遺族の玉串拝礼と一緒に参列者の拝礼で、永代神楽祭のお詣りは終りました。

控室に戻り高橋さんとの十年振りの再会の挨拶をしてから、更めて高橋さんから今日の参列者の渋谷隊長の長男夫人と斎藤隊員の姉妹と生存者加藤祥文さんご夫妻の紹介と、第六十四振武隊は国華隊とも呼ばれて隊長の立派な人柄や隊員の奮戦の事は、当時の新聞に大きく報道された事のお話がありました。受付で私の声を聞いて控室に案内して下さったのは鈴木さんの奥様でした。

靖國神社での六月十一日の再会は幸運な巡り合せで再会を喜ぶことが出来ましたので、皆様は次の予定もありますので遊就館の前でお別れ致しました。

第六十四振武隊の訓練中の宿舎が原町の松浦家であった話を聞いて思出した一枚の写真がありました。昭和六十二年四月靖國神社遊就館での特別攻撃隊写真展で、私がガラス越しに写したので並んでる隊員の顔は、はっきりわからないのですが下の説明は読めるのです。「陸軍第六十四振武隊　原ノ町飛行場で訓練中の隊員が寄宿先の松浦家で伝統の相馬野馬追の武具をつけたところ　同家の圭子さんは隊員のアイドルだった　昭和二十年五月　原ノ町」

私は写つした時第六十四振武隊の記念写真の事は気がつかなかったのですが、ご遺族や高橋圭子さんと六月十一日靖國神社にお詣り出来たのも不思議な縁と思いました。

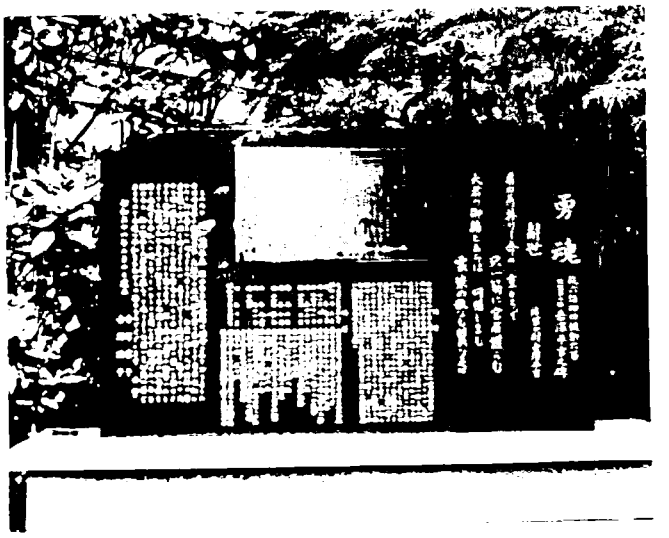
（平成四年七月二十八日）

第64振武隊

大尉　澁谷健一　少候22小飛3
少尉　稲垣忠男　特操1
少尉　巽　精造　幹候9
軍曹　井上　清　米子乗員養成所
軍曹　稲島竹三　昭17
軍曹　加藤俊二　古河乗員養成所
軍曹　斉藤正敏　仙台乗員養成所
伍長　岸田盛夫　少飛13
伍長　森　高夫　少飛13
機種は99襲
発進基地は万世
20年6月11日沖縄周辺の敵艦船に突入

B29に体当りした吉沢平吉中尉

この碑は武蔵野市吉祥寺東町2—9大法禅寺の境内にあり、吉沢中尉（戦死後二階特進し少佐）の二人の姉が建てたものである。吉沢中尉は陸士56期、飛行第47戦隊に所属し成増飛行場に在って本土防空に任じていた。機種は四式戦である。活躍の模様は碑の中央に銅板に刻んではめ込んである感状によって明らかなので、感状の全文を紹介する。



感状

陸軍中尉　吉沢平吉

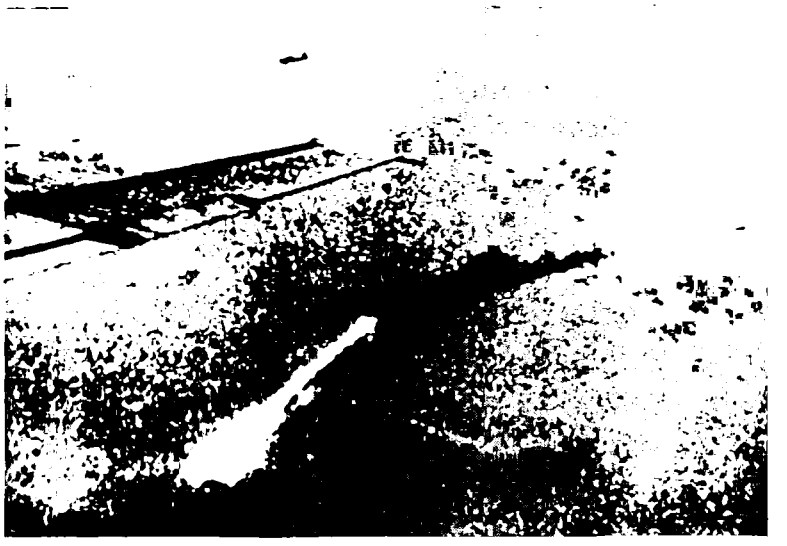
右者マリヤナ基地ヨリスル米空軍ノ数次ニ亘ル帝都大空襲ニ際シ其都度勇戦以テB29撃墜二機撃破四機ノ赫赫タル戦果ヲ収メアリシガ昭和二十年二月十日敵B29約九十機ノ太田附近空襲ニ方リ勇躍之ヲ下館上空ニ邀撃シ忽チ其一機ヲ撃破セリ敵機攻撃ニ方リ自機モ亦被弾損傷シタルモ吉沢中尉ハ毫モ之ニ屈スルコトナク勇戦奮闘遂ニ後続敵編隊ノ左外側機ニ対シ敢然体当リヲ決行之ヲ完全ニ撃墜スルト共ニ自ラモ壮烈ナル戦死ヲ遂ク

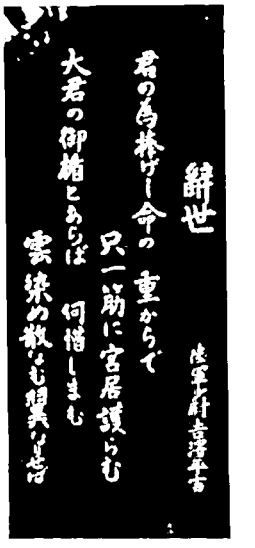
吉沢中尉ハ真摯着実而モ内ニ烈烈タル気魄ヲ蔵シ戦技亦卓抜ナリ敵機要地ニ侵襲スルヤ奮然挺身シ勇猛果敢毎戦武勲ヲ重ネ遂ニ玉砕以テ要地掩護ノ大任ヲ完遂セルモノニシテ其行動真ニ武人ノ亀鑑ト謂フヘク武功亦抜群ナリ

仍テ茲ニ感状ヲ授与シ之ヲ全軍ニ布告ス

昭和二十年二年二十三日

防衛総司令官　稔彦王





特攻隊員の精神を視覚に訴えて
後世に伝える油絵の展示所設置
沖縄摩文仁丘にある義烈碑の境内

全日本空挺同志会

沖縄本島南端の摩文仁には殆んどの県の慰霊碑があるが、その丘の一番高い処に義烈空挺隊の慰霊碑がある。副碑の表は「義烈空挺隊讃」と題し、特攻隊に指定されてから突入までの一部終始が銅板に刻みはめ込んである。裏面には同じように一一三人全員の名前が刻んである。しかし訪れた人が全部これを読んでくれるかどうかわからない。特に現代の若い者の中には、長い碑文など終まで読む者は少ない。そこで境内に常時絵を展示しておくことにしたのである（境内は一二〇坪ある）。

先づ20号の油絵二点を展示できるケースを購入した。野外設置用で耐久性優れた上質のものである。特志家の斡旋で極めて廉価で入手できた。これを空挺同志会沖縄支部が設置したのであるが、趣旨に感動した現地の建設業者が無料で施行し、このようなものが平成4年12月7日に完成した。

さて、その中に収める絵であるが、義烈空挺隊が健軍飛行場を発つとき、軍嘱託のカメラマン小柳次一氏の撮った写真が沢山ある。その中から数点を選び特攻隊慰霊顕彰会理事の松本武仁氏に写真の構図を油絵に画いてもらい掲げることにした。選び出した写真はこの四点で、上の二つは既に出来上って展示してある。常時二点を展示できるので、適宜取り替えることにしている。現地に行かれる機会あれば是非見て頂き度い。

健軍出撃直前郷里に別れを告げる

前夜何か書き残す一兵士

もう金はいらぬ国防献金にしようと
有金を出し合う

左奥が主碑　左手前が副碑　右が展示ケース

こんなに食料をもらっても全部食うまで
生きてはいないと整備員に与える

絵画展示ケース

第26回予科練戦没者慰霊祭に参拝して

副会長　鈴木　瞭五郎

十月十八日（日）一〇三〇より、第26回予科練戦没者慰霊祭が好天の下、陸上自衛隊土浦駐屯地雄翔園において挙行された。園内は遺族、生存戦友によって埋められ、式は僚友による軽飛行機慰霊飛行の乱舞により開始され、武器学校学生、隊員による献火、弔銃と国歌斉唱ののち、前田武会長の式辞、同窓代表岡野利男氏（特飛会理事）の追悼の辞が奉呈された。次いで献花が行われ、来賓代表木村欣浩武器学校長が祝辞を述べたのち、パールハーバー生存者協会代表リチャード・フィスク氏（夫妻でハワイより来訪）のスピーチとラッパ鎮魂曲の吹奏で式は国際化した。中澤康子遺族代表（特乙二期三郎姉）の遺族の辞には切々たる心情がこもっていた。

次いで高松宮妃殿下御歌の奉詠と同窓全員による若鷲の歌斉唱には強く胸を打たれるものがあった。最後に奉納行事として陸上自衛隊音楽隊の演奏、地元婦人会による若鷲の詩の舞踊と武器学校隊員による常陸陣太鼓が演ぜられ式のムードを盛り上げた。

一二〇〇より別会場に移って直会行事が約一時間行われ、和やかな場内で会食、懇談、軍歌演習が続く中でリチャード・フィクス氏を相手に日米ラッパ交歓吹奏があり、拍手鳴り止まず上機嫌のフィナーレとなって閉会した。

白鷗遺族会平成四年度秋季戦没者慰霊祭（第八十九回）に参拝して

副会長　鈴木　瞭五郎

海軍飛行予備学生戦没者の秋の慰霊祭が十月十一日（日）一一三〇より靖國神社で挙行され、遺族、生存期友五〇〇名を超える大集団が拝殿を埋め、大阪支部長の友情切々たる祭文奉上のあと、「同期の桜」の涙の斉唱が神聖の森に響いていった。終って一三〇〇より靖国会館において定時総会、懇親会が催され、歌曲の演奏が興趣を盛り上げ、一四三〇盛会裡に閉会した。六五〇名の特攻戦死を含め二、四五九名の戦没者を出した海軍飛行予備学生の戦勲を偲び、改めて御霊安かれと祈るや切なるものがあった

山縣大弐先生の絵とわが遺書

会員　窪川　敏郎
（山梨県塩山市在住）

まずらをのかなしきいのちつみかさね　つみかさねまもるやまとしまねを
――三井甲之――

甲府市の西隣りの敷島小学校の近くに住まわれていた、当時の国粋歌人として高名だった三井先生の短歌は、やまとことばを尊ばれて、すべて平がなでものされていたようである。その歌碑は竜王町の山県神社に昭和33・4・6に建立された。

平成3・9・22に杖をついて約五十年ぶりに同神社を再訪、歌碑の前で三井先生の歌を胸の奥で岳風流で吟じてみた。特攻隊員の胸に教示を与えるこの歌である。

学問の神様――山県大弐先生の似顔絵の右にこの歌を記してみよう――この思いにかられた私は、入手した大弐先生の肖像画を手本にして湯治宿で第一番に描きあげた。（平成5・1・6）

われもまた益良丈夫ぞ大君の空の御楯と今ぞ征でゆく（20・3・3北京特攻宿舎にて）

それにしても思い出されるのは陸軍通信用紙に書いた、小学校一年当時の恩師にあてたわが遺書である。

昭和二十年五月二十三日十二時、福岡県芦屋郵便局にて、発信者・窪川少尉（当時）、受信者・雨宮鶴衣先生

皆様、大変御心配かけさせました。敏郎は只今より悠久の大義に生くべく、皇国の御楯となります。中・北支にて支度は終りましたので、今度急に神のお召により○○に向ひます。先生の御恩、忘れません。太平洋に身は砕け散るとも、私の魂は必ず神国に生きて居ります。そして必ずや故郷の空へも帰ります。

では、ニュースにて又御目にかゝりませう。光子さん。千人針も一緒ですよ。

では皆様、御機嫌よう。さやうなら……。

大日本帝国萬歳！　征く敏郎より

皆々様へ

恩師先生は、わが兄弟姉七人全員の玉宮小学校一年生時代の恩師でもある。平成五年、九十一歳、歩行できない身でも余生を送られている。遺書発送の封筒には、福岡県遠賀町高知町市場として偽名で出してあった。直接に芦屋局へ投函したので検閲もされずにすんだらしいが、さすがに「沖縄」へとは書けずに「○○へ」と書いたのであった。

残念なことに父母あての遺書が遂に見つからぬ。見つかったのは、特攻隊出撃の、留守宅への通知公用文書のみである。ガリ版印刷の便箋一枚分の、私の氏名のみインク書きのもので父あての候文である。（昭和二十年六月一日付、天風第三五〇〇四部隊長㊞）

――特攻隊出撃、留守宅への通知公用書――

謹啓

新緑の砌御尊家御清穆之段現決戦下大慶に存じ奉り候

陳者今般窪川敏郎殿には大命を拝され勇躍重任の途に就かれ候　御出発の折赴任先での行動に支障を来してはとの深き御趣旨より日常の所持品を当部隊に委託被遊候故　早速右品々取纒め書留小包便にて御送付申上候

何卒宜敷御受納被下度願上候

先づは取敢ず御通知迄如斯に御座候　敬具

六月一日

天風第三五〇〇四部隊長

窪川延幸殿　㊞

血判を捺して志願した特攻。一銭五厘の召集令状とはチト違う。自転車で塩山局へ遺品受取りに行った弟も平成二年秋に他界した。

（特操一期・第一一〇振武隊副隊長・中尉・七十歳）

昭和20年4月1日北京西郊飛行場にて血風隊（第一一〇振武隊）三式戦

特攻随想（第一話）

理事　上坂　康

若い輝くひとみ

私は昭和五十三年春から約一年半、江田島の海上自衛隊幹部候補生学校（赤れんが）の教育部長兼学生隊長を勤めた。これは昔の海軍兵学校でいえば、教頭兼生徒隊監事にあたる配置であり、私はこのポストに就いた最後の海軍兵学校出身者であった。

海軍には「品行方正」をからかって「ヒンコウホウマサ」というもじった言い方があった。お行儀の悪い私は「ホウマサ」な者に限るこんな配置に行かされるとは夢にも思っていなかったから、人事発令された時には驚いて、実のところあまり喜んで着任した訳ではなかった。ただ、折角拝命したからには、この最後の機会に、江田島教育の欠陥を遠慮会釈なく切り捨て、良い点だけを伝統として継承させようと決意して赴任した。

ところが、この配置は実にすばらしい勤務であった。むろん、私の海上自衛隊における最良の配置であった。この学校の幹部候補生や幹部予定学生は、防衛大学校卒ばかりでなく、種々の系列出身者がいた。私は機会があるごとに、学生になんでも自由に質問させた。するとこれらの学生は、みな目を輝かせて私の回答に聴き入ってくれたのである。

私はこの配置の前にも後にも、何度となく講演や講義をする機会があった。しかし今日まで、この江田島における候補生たちのような私を見つめる輝くひとみを見たことはない。彼らはこの際、私に日本海軍のことを聞いておきたかったに違いない。彼らの質問の多くは海軍や兵学校に関することであり、しかもその大部分は「特攻」に関することであった。

教育参考館の感化

私は現在、特攻隊慰霊顕彰会の理事をしている。定例の理事会では必ず軍隊時代の話に花が咲く。家でも近所でも「特攻」の話などしてもわかる者はいないから、ここで昔話をするのが楽しみだと言う人がいるくらいである。ところが江田島での私は、寄ると触ると学生から海軍時代のことを尋ねられ、「特攻」の話を聞かしてほしいと頼まれる。なんともすばらしいことではないか。

井上成美海軍兵学校校長（昭和17～19年）は、生徒にあまり実戦の話をしないよう、教官に対して指示しておられたそうである。生徒が落着いて基礎的な勉学に身を入れなくなるおそれがあったからだそうである。私もこの井上校長のお考えがわからぬではなかった。しかし当時の海軍生徒と現在の幹部候補生では、時代と背景と精神年齢が違う。それに、候補生たちがなぜ現在、江田島に来て「特攻」について考えるようになったかを知っている私は、これに応じて彼らに答えてやらなければならないと思ったのである。

江田島の海上自衛隊には、兵学校以来の「教育参考館」という、東郷元帥とネルソン提督の遺髪室を中心とする立派な史料館がある。その一劃の「特攻室」には、大理石に刻まれた海軍全特攻隊員の銘碑があり、そこに展示されている階級を問わぬ隊員の遺書や遺品等は日本最高であるといわれている。この史料館は一般に公開されているので、全国から見学に来る多数の市民に大きな感動を与えている。

防大や一般大学などから幹部候補生学校に入校した候補生たちは、これまで聞いたことはあっても深く考えたことのなかった「特攻」について、江田島に来て教育参考館を見て戦史の教務を聴いて、ようやくわが身にふりかえって真剣に考えるようになるのである。

特攻に関する質問

候補生たちは、教育参考館に展示された特攻隊員の遺書を読んで、一様にそのおう盛な士気、熱烈な祖国愛、真しな忠孝心、崇高な犠牲的精神に感動する。しかし、特攻作戦の実施記録のような展示はないので、その具体的戦果などについて、戦史の講義を聴き自分で史料を読んで調べることになるのである。

そして、ある程度の予備知識を持って私に質問したことは、たとえば次のようなものであった。①特攻兵器が最初に使用された当初は戦果があったが、米軍の対処が早かったので、程なく効果はほとんどなくなったようであるのに、どういう意図で特攻作戦を終戦まで継続したのであろうか。②特攻隊員になるのは自由志望であったという記録もあるが、実際はどうだったのであろうか。③現代人の感覚から特攻作戦をどう考えたらよいと思われるか。

このような質問に対して、私に回答

昭和20年8月15日16時30分．「最後の特攻」敢行のため大分航空隊で搭乗機に向かおうとする特攻隊員。これは終戦の詔勅かん発後のことであり，宇垣纏中将（第5航空艦隊司令長官）の「私兵特攻」といわれるものであった。多くの中には心ならずも特攻に散華された隊員もあるかもしれない。しかしこの写真の向かって右から2人目の北見武雄中尉（海兵73期）の顔は「死所を得た」喜びに満ちているようである。まさに「生きながらにして神」とゆうべきであろう。

する資格があるかどうか若干疑問であった。私は海軍兵学校の75期生であり、昭和二十年の秋に航空隊に派遣される予定であったが、三学年生徒のまま終戦になったから実施部隊を知らない。ただ、特攻希望であったし、海上自衛隊にもいたから、特攻関係の史料を読んで一通りの知識を持っているに過ぎない。しかし私は米側の記録を読んでおり、米海軍の砲術学校（昭和30年）と誘導弾学校（昭和39年）に留学したので、二次大戦末期に米海軍が使用した兵器や戦術（殊に艦隊防空）について知っている。対潜水艦戦については、海上自衛官の必須知識であるから、これも一応心得ている。

たから戦争末期（殊に昭和20年3月以降）の特攻作戦は、水中特攻の一部を除いて、ほとんど戦果を挙げられないほど実施困難な情況に陥っていたし、また仮に本土決戦があっても、どの程度特攻作戦が奏効したか疑問であったことも知っている。したがって、候補生たちが前記のような疑問を持ったことはよく理解できた。

現代人の考え方

私はよくいわれるように「特攻は用兵の下道である」ということを疑わない。しかし当時、これ以外に祖国を救う道はないと信じていたからこそ、特攻を志望するつもりであった。好む好まざるの問題ではなかったのである。現在でもこの気持に変りはなく、当時と同じように、これ以外に手段がないというような事態が再来すれば、特攻を断行するつもりである。

私は常にこの信念をもって候補生と接した。しかし戦後の時代環境の中で育った、価値感と哲学の異なる若い候補生たちに、私の考えを押し付けるのは避けた。私は特攻について知っている限りの話をして聴かせて、彼らに自分で考えさせるように仕向けた。私は校内よりも、近くの小島に「幕営」というキャンピングのような訓練に行った際、よく特攻の話をしたものである。

戦史を読んで特攻の効果があったかなかったかをうんぬんするような評論家的発想ではなく、戦況不明のまま現在特攻を命じられたら、君ならどうするかという私の問いに「その時の情況から判断して決心します」などという要領のいい返答しかしない候補生が多かった。しかし、戦史の教官や分隊長（区隊長にあたる）などから聞いてみると、当時の候補生は、特攻はナンセンスである、攻撃効果が期待できないのに特攻するのは無意味であり犬死である。国民は自衛隊は隊員に特攻を命じられないはずであるが、もし命じたら断固拒否する、と考えているようであった。

英国人のデューティ

私は正式の訓育の時間に、幹部候補生に対して次のとおり講義した。

"England expects that everyone

will do his duty."（英国は各員がデューティを果たすことを期待する。）

これは一八〇五年一〇月二一日のトラファルガー海戦の際、ネルソン提督が掲げた有名な信号文である。それから百年後の明治三八年五月二七日の日本海海戦の際、東郷聯合艦隊司令長官がZ旗を掲げて示した「皇国の興廃此の一戦に在り、各員一層奮励努力せよ」という信号文とよく対比される。「皇国の興廃」を東郷長官が起案したと思う者はいないし、事実そうではないが、「英国は」の方はネルソン提督の起草であるといわれている。それほどネルソンは士気を鼓舞する名人だったのである。

そのネルソンの信号の中の「デューティ」は、義務・任務・職務などと訳されているが、当直という意味もある。つまりその掌に当たった者は、課された任務を遂行しなければならないのであり、それがデューティなのである。

その任務の中には、ナバロンの要塞を無能化せよとか橋頭ほを死守せよというような厳しい使命もあるが、最も勇気を必要とするのが、生還を期しえられない「特攻」であると考えるべきである。英国でも米国でも、軍人にし烈なデューティの遂行を要求している。日本だけが自衛官にそれを要求しないなどと考えるのは間違いである。

おわりに

私は二年に一度くらい江田島に行くが、旧部下に聞くと、私が去ったあと幹部候補生学校では特攻談義などないそうである。私は後世に特攻精神だけは伝えなければならないと思っているが、日本はやがて特攻作戦のできない国になるような気がしているのである。

（隊友会東京都支部連合会副会長）

江田島の教育参考館

特攻隊慰霊顕彰会の動静

理事長　最上貞雄

昨年5月11日会長の竹田元宮様が薨去され、次の会長に瀬島龍三様が就任されました。

新会長は若くして国に殉じられた特攻隊員の慰霊顕彰事業は国民の間に広く理解認識していただき旦つ末永く続けて行かねばならないと申され、任意団体であったら我々が亡き跡は消えてなくなる恐れが多分にある。この顕彰会は公益法人にして将来末永く残すようにせねばならぬとのお考えで、財団法人に申請することとなり、昨秋よりその準備にとりかかっております。

大変困難なことですが、この四月頃までに認可を受けられれば幸甚と考えております。

従って次の様なことをお願い申し上げご了承を戴きたいと存じます。

一、特攻隊合同慰霊祭の延期について

財団が認可されましたならば、総会を開催せねばなりません。その折特攻英霊にもご報告致したいと考え恒例の特攻隊合同慰霊祭も総会の折に執り行うことに致しました。今のところ五月中に開催出来ればと思っております。

二、特攻隊慰霊顕彰会の財産事業を移転の件

財団が設立されましたら、本会の全財産を財団に無償譲渡をし、その事業も財団に引継ぐことになりますのでご了承下さい。

三、役員の辞任更迭の件

現理事を始め役員の方はご辞任いただき、新に財団の寄附行為にもとずき評議員が選出されその上で理事役員が選出されることになります。

四、年会費増額の件

皆様よりの会費によって、事務所は運営されます。従って会費を増額せざるを得なくなりました。

年会費一〇〇〇円を、二〇〇〇円と致したく、よろしくお願い申し上げます。別紙郵便振込用紙にてお振込み下さい。

特攻隊慰霊顕彰会新事務所開設

瀬島会長のご尽力と、先日逝去されました森ビルの森社長の大変なご好意により次の所に新事務所を開設しました。

住所　〒105東京都港区虎ノ門三―六八　第六森ビル

電話　03―三四三二―一〇九〇

FAX　03―三四三二―五五六七

連んで森社長のご冥福をお祈り申し上げます。